テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

FF14　備忘ログ(PATCH2.0)　ジョブクラス編

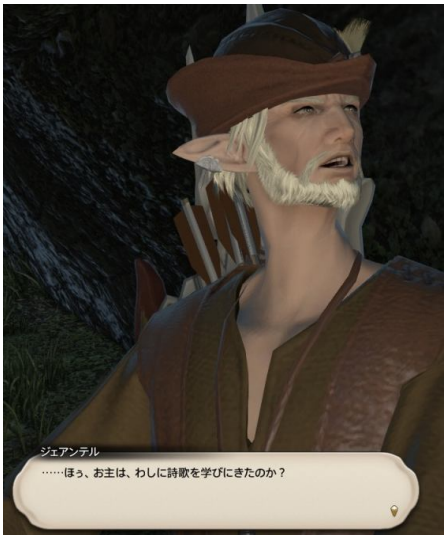
詩人クエスト

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

響きあうふたつの音色

ルシアヌ ： ◇◇◇。黒衣森に、イクサル軍の気球がまた現れたの。
イクサル族を見ると……　神勇隊が大敗北を喫した「中央高地の惨劇」を思い出すわ。……ちょうど、この季節の出来事だったしね……。
今はガレマール帝国への対応もあるし、より戦力を強化しないことには、敗北が繰り返されてしまうかもしれない。
でもね、世の中そう悪い話ばかりじゃないのよ。躍り上がるほど、いい話でもないけれど……。
かつて神勇隊の強弓と称えられた、伝説の「吟遊詩人」が、この黒衣森へ帰還しているそうなの。
彼の名は「ジェアンテル」。仲間を鼓舞する「戦歌」を歌う、数少ない「吟遊詩人」で、
その弓の腕前は、神業の域だと称えられているわ。
ところが、数多の戦で戦功を挙げた「強弓のジェアンテル」は数十年前に神勇隊を去り、戦場から姿を消したの……。
以来、ジェアンテルは弓を捨て、俗に言う歌い手としての「吟遊詩人」に身をやつして、各地を放浪していたようね。
もちろん、彼に弓術の教えを請いたいと、多くの弓術士が彼を訪ねているようだけど……　「詩歌なら教える」と断られてしまうそうよ。
みんな、極めたいのは弓術であって、歌じゃないのにね。伝説の「吟遊詩人」には、取りつく島もないらしいわ。
ね、躍り上がるほど、いい話でもないでしょ？　……あら、あなたも伝説の「吟遊詩人」に会ってみたいの？
だったら彼の滞在先を教えてあげるわ。
強弓と称えられた伝説の「吟遊詩人」は、南部森林にある「クォーリーミル」の西あたりに滞在中よ。
普段は気さくな人らしいから、たぶん会えはするでしょう。
あわよくば、彼が弓を捨てた理由を探って……　彼の気が変わるよう促してくれるといいんだけど。
グリダニアのためにも、弓術の発展のためにもね。
でも、さすがのあなたでも難しいわよね……。ともかく行ってらっしゃい、健闘を祈ってるわ。

ジェアンテル ： おやおや、またお客さんか。……いかにも、わしがジェアンテルだ。
久方ぶりに森へ戻ってみれば、お主のような若人が大勢、こんな老いぼれを訪ねてくれて……ありがたいのう。
ささ、共に詩歌を吟じ、木々の緑を愛でるとしよう。
おや、ずいぶん素晴らしい弓を持っているようだが……　お主もまた、「強弓」ジェアンテルに用があるのかね？
ならばすまぬが、どうかお引き取り願いたい。わしはとうの昔に弓を捨て、今は気ままな放浪の身。
山紫水明を愛で、詩歌を吟ずる、老いた「吟遊詩人」だ。
それに……見たところ、お主はすでに相当な腕前では？　そのまま鍛えれば、申し分ない弓の使い手となろう。
とはいえ、弓の鍛錬だけでは、真の強さは得られぬが……。そう、どこぞの詩歌に歌われる「罪深き愚者」のようにな。
……ほぅ、お主は、わしに詩歌を学びにきたのか？　この乱世に詩歌を学ぶ余裕があるとは、見上げた心がけ。
詩歌と弓術には、実は密接なつながりがあるのだよ。
さて……　お主が吟ずる詩歌は、いかなる響きになるのやら。
森に住むあやつも、きっと同じ思いを抱くはず。……さあ、さっそく準備を始めるとしよう。
ここから東方にいる「プクノ・ポキ」というモーグリ族を訪ねよ。
お主があやつのお眼鏡にかなうのなら、吟遊詩人として、少し手ほどきをしてやろうぞ。
♪時神アルジクよ　砂時計をくつがえし……♪
♪かつて見た戦いを　我と　この者に語りたまえ……♪



プクノ・ポキ ： クポー！　クポ、クポ、クポ、クポ、クポー！！　たいへんクポ！　プクノ・ポキ、一生の不覚クポ！
……クポッ！？　きみ、プクノ・ポキの言ってること、わかるクポ！？
なんか用なのクポ！？　プクノ・ポキ、今、いそがしいクポ！
クポクポ！？　きみ、ジェアンテルに言われて、ここに来たクポ？　きみ、ジェアンテルの知り合いクポね？
ジェアンテルの歌は、すごいのクポ～。聞いてると～心がホクホクほんわかして～　力が湧いてくるクポ～！
プクノ・ポキには、おひさまの光みたいに～　キラキラに見えるクポ～！
でも、ジェアンテル……　せっかく森へ帰ってきても、歌ってくれないクポ……。そんなの、そんなの、約束が違うのクポ……。
そうクポ！？　きみが歌えばいいクポ！　だって、きみのまわりには……　ジェアンテルの歌と、そっくりな響きが踊ってるクポ！
ジェアンテルと同じ響きをまとうきみなら、だいじょうぶクポ！　そのためには……クポ！？
思い出したクポ！　プクノ・ポキ、今、大ピンチだったクポ！
きみ、ちょっと手伝ってクポ！　大事なお守りが、盗賊に奪われちゃったクポ！　ジェアンテルから詩を教わるための、しれんクポ！
盗賊が逃げ込んだ「朽葉の吹溜まり」で、「プクノ・ポキのお守り」を取り返してクポ！

プクノ・ポキ ： もう、「プクノ・ポキのお守り」を見つけたクポ！？
すごいのクポ！？　このお守りをジェアンテルに見せるのクポ！　「ずるいけど、楽しみクポ」って言いながらクポ～！！

ジェアンテル ： おお、おかえり。見事、「プクノ・ポキのお守り」を受け取れたようだな？　どれ見せてくれ……ん、プクノ・ポキの言伝もあるだと？
わはははは！　なるほど「ずるいけど、楽しみクポ」とな！　これは一本取られたのう。
いやすまぬ、昔交わした、あやつとの約束があってな。わしが「吟遊詩人」となってからずっと、
あのモーグリ族には、世話になってきたのだ。
あやつに会うたび、森にとどまって詩歌を吟ずるようにと頼まれていたのだが……　わしには、行かねばならぬ戦場が待っていたからな。
大切な仲間を守らねばならぬ、戦場だよ。……そして、わしには、この黒衣森へ戻れぬ事情ができた。
だから、お主が「吟遊詩人」となれば、あやつに歌ってやれる者が増えると思ったのだよ。
あやつには、その考えが見抜かれていたようだの。やはり、モーグリ族は聡い生き物よのう。
モーグリ族は、音楽をこよなく愛す種族でな。お主がお守りを持ち帰れたということは、
モーグリ族が、お主の弓と詩歌の素質を認めたということ。
つまり、プクノ・ポキは、お主に「吟遊詩人」となってもらいたがっているのだ。だから、そのお守りはお主の物だ。大切にしなさい。
これは、「吟遊詩人の証」というクリスタルでな。「吟遊詩人の証」には、古の「吟遊詩人」の記憶や旋律が、
その想いと共に刻み込まれている。
それを携え、さまざまな経験を積めば、クリスタルから古の旋律が心に響くだろう。
その旋律に乗せて歌うことで、お主の歌声に力が宿るのだ。
しかし、歌いこなすには弓術の経験が必要だ。吟遊詩人と弓術士の力は、表裏一体なのだから……。
それについては、この先、語って聞かせるとしよう。
さあ、多くの経験を積み、古の旋律を再現すべく、お主の冒険を続けるのだ。
プクノ・ポキの想像を超える「吟遊詩人」になるのだぞ。己の成長を実感したとき、再びわしのもとへ戻ってくるがよい。

弓兵の戦歌

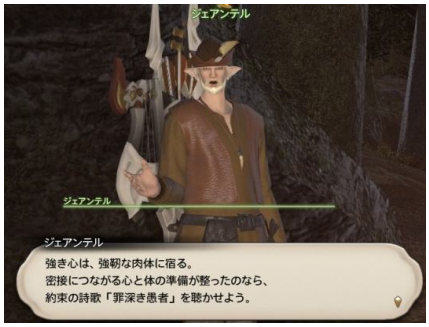
ジェアンテル ： おお、その眼光……随分と腕を上げたようだね。遠い昔……わしもお主のような眼をしていた時代があったものさ。
それが、なぜ戦場と弓を捨て、詩歌のみに生きるようになったのか……気になるかね？
万物は転変す。長いこと生きていれば、いろいろあるものさ。変わらない方が不自然というもの……。
わしはね、詩歌の力に魅せられたのだよ。
詩歌の力は、今や忘れ去られてしまった……。しかし、古の戦乱時代においては、「弓兵の詩歌が勝敗を分かつ」と言われていたのさ。
……そう、吟遊詩人が奏でる「戦歌」は、もとは弓兵が奏でた詩歌なのだ。
弓兵は、遠方の敵を射るのが務め。それ故に、敵味方入り乱れての混戦ともなれば、戦陣の後方に下がり、攻撃の隙を窺わねばならぬ。
それは……仲間が傷つき、倒れる様から、目を逸らせぬということ。
これが、いかに苦しく、辛く、もどかしいか……　弓術士のお主なら、容易に想像できるだろう？
当然、弓兵の胸中に、仲間への激励の念が湧きあがる。この抑えきれぬ激情に突き動かされ、いつしか弓兵は戦場で歌いだした。
誤射を避けんと握りしめた弓の弦をかき鳴らし、この想い仲間へ届け、とね。……そう、これが吟遊詩人の始まりだ。
彼らが歌う「戦歌」は、戦場に立つ兵の士気を高め、「死者には慰めを、勝者には祝福をもたらす」と、もてはやされた。
しかし一方で、弓兵は貴重な戦力だ。そこで、弓兵を攻撃に専念させつつ、戦歌の効果も得んと、「軍楽隊」が組織されたこともある。
だが、その演奏は、兵の心に響かなかったという……。
なぜなら、楽隊員は演奏に専念し、戦うことがない。仲間と共に命を削り、敵へ立ち向かう弓兵とは、込める想いが違うのだ。
さて……昔話はこれくらいにして、本題に入ろう。この切実な想いを身の内で感じることなしに、
「吟遊詩人の証」より、古の旋律を聴くことはできぬ。
東ラノシアの「レインキャッチャー樹林」には霊が彷徨うという。この出現を待ち、討伐することで、霊を鎮めてみよ。
霊との戦いを通して、霊が抱える無念を味わえば、「吟遊詩人の証」より古の旋律を聴くことができるだろう。

ジェアンテル ： お帰り、「吟遊詩人の証」の輝きが増したね。「吟遊詩人の証」より聞こえし古の旋律は、お主の心に響きわたっているはず。
それを、実戦の中で奏で、さらなる多くの想いに心震わせるのだ。気が向いたら、この老いぼれに土産話を聞かせてくれ。

時神の境地

ジェアンテル ： おお、一段と頼もしくなったね。お主の成長は、老いぼれの色あせた日常に彩りを添える。
彩り……そう、音楽がもたらす彩りは、広く知られておる。
街角で音楽を奏でる、歌い手としての吟遊詩人……　彼らがもてはやされるのも、音楽がもたらす彩りのため。
吟遊詩人と聞いて、まず思い浮かべるのも、こちらだろう。
だが、この源流もまた弓兵にあるということは、あまり知られていない……。
一時の平和な時代……戦場を去った弓兵たちは、弓を竪琴に持ちかえて、己が目にした戦場を伝え歩いた。
争乱の荒波に消えていった仲間の武勇を語り継ぐために。
やがて、その演奏は宴や酒場での余興を担うようになり、それが彼らの日々の糧を得る手段となっていった。こうなると堕落も早い……。
彼らは人気を得んとし、仲間の生き様を描いた詩歌を派手で甘い幻想話へ、すっかり書きかえてしまった。
「空想の魔物退治を描いた英雄譚」や、「騎士と乙女の恋物語」などにね。
そんな詩歌に、戦場の仲間を鼓舞する力はない……。かくして、吟遊詩人の「戦歌」は力を失い、忘れ去られたというわけだ。
これを嘆いたのが、モーグリ族だった。音楽を愛すモーグリ族は、吟遊詩人の「戦歌」を消さぬため
その記憶と旋律が刻まれた「吟遊詩人の証」を探し集めた。
そして、ふさわしいと認めた者に、それを授けていたのだ。戦いの中にあっても仲間を想うことができる、優れた弓の使い手を厳選してね。
とはいえ、こけおどしの物語にさえ学ぶところはある。例えば、詩歌「罪深き愚者」を聞いたことはないかね？
……ないと申すか。……ならば、わしが聴かせてやろう。
数十年前……多くの死傷者を出した「中央高地の惨劇」を主題とする、悲しき歌を……。
……だが、その前にまず、お主の心を鍛えねばならぬ。でなければ、この愚かな話から教訓を見出すこともできぬからな。
東ザナラーンの「ウェルウィック新林」には、子を失った悲しみにとらわれ、凶暴さを増した魔牛の夫婦がいるという。
この出現を待ち、戦いの中で、魔牛の悲哀に触れよ。己の弓で魔牛を悲しみから解放してやれば、
「吟遊詩人の証」より古の旋律を聴くだろう。

ジェアンテル ： お帰り、「吟遊詩人の証」の輝きが増しているな。お主の心に次なる旋律が響いているのだろう。それこそが、お主の心の強さの証……。
心を鍛え、新たな境地を垣間見た今こそ、驕ることなく、弓術の鍛錬に励むのだ。
強き心は、強靭な肉体に宿る。密接につながる心と体の準備が整ったのなら、約束の詩歌「罪深き愚者」を聴かせよう。



罪深き愚者

ジェアンテル ： おお、そのたたずまい……　秘められた真実を見抜く心と、強さを手にしたようだね。
今のお主なら、「罪深き愚者」の詩歌に込められた教訓を、正しく読み取ることができるだろう。
「罪深き愚者」は、己の力に溺れた傲慢な弓術士の物語……。
己の腕を過信するあまり、軍命に背き……　多くの神勇隊員を死へ追い込んだ「中央高地の惨劇」を描いている。
♪驕りし弓兵　見張りに飽きた　月を見上げて　愚考した♪
♪今こそ攻め時　敵地へ向かわん♪
♪千の敵を射ころし　千の仲間を助けん♪
♪愚かな弓兵　罪を犯した　軍命に背き　勇み矢放つ♪
♪驕りし弓兵　雄叫び聞いた　後ろ振り向き　慙愧した♪
♪敵兵攻め込み　自陣は壊乱♪
♪千の敵を射ころし　千の仲間も亡くした♪
♪愚かな弓兵　罪から逃げた　天罰求めて　あがき矢を折る♪
……さて、この愚か者の詩歌からは、学び取れることが無数にある。だが、言葉による理解に価値などありはしない。
お主の心が理解し、その教訓を糧とし、行動へ表さねば、真に学び取ったとは言えないのだから。
お主の行動を、じっくりと見守らせてもらうとしよう。……今回はわしと、ある場所へ同行してもらいたいのだ。
目的地は、北部森林の「ゲルモラ遺跡」。「中央高地の惨劇」の犠牲者が数名、葬られている場所さ。
そこに「ニメーヤリリーの花束」をたむけてやってくれ。
♪時神アルジクよ　雨を天に返し……♪
♪かつてみた戦いを　我とこの者に　語りたまえ……♪

ジェアンテル ： イクサル兵だと！？
……できぬ……わしには……。
なぜ、わしだけが、まだ生きている……？
消せぬ罪が、新たな罪を呼ぶのか……。すまぬ……◇◇◇……。
……危険にさらしてしまい、すまなかった……。わしは弓を捨てたのではない、もはや弓を射れぬのだ。
神勇隊の「強弓」ジェアンテルが、聞いてあきれる。
「中央高地の惨劇」を招いた「罪深き愚者」……　己の腕に驕り、持ち場を離れてしまい多くの仲間を死へ追いやった弓術士……。
それが、わしの……　かつて、強弓と呼ばれた男の真実……。
お主なら、わかっておろう？　弓の使い手は、仲間の道を切り拓き、支援するのが務め……。
弓の初歩すら解さぬわしに、弓を握る資格などない……。
今でも、目を閉じるたび……仲間が……わしを責めたてる。だが、あの日、わが魂も、仲間の命とともに粉と砕けた……。
以来、わしは……己の死地を求めて彷徨い歩く、生ける屍……。
この苦悶こそ、わが身に課された罰……。
お主の心に、古き旋律が響いたか。お主に新たな学びがあったのが、せめてもの救い……。
目的は、もう十分に果たせた。お主ならば、「罪深き愚者」の轍を踏むことはなかろう。さあ、ここで、引き返すとしよう……。
わしは、先に戻る。いつもの場所で待っているぞ。

ジェアンテル ： 無事に戻ったか。危険に巻き込んで、すまなかった……何度でも謝ろう。
今一度、お主に聞いてもらいたい願いがある……。聞いてくれるのなら、再び声をかけてくれ。

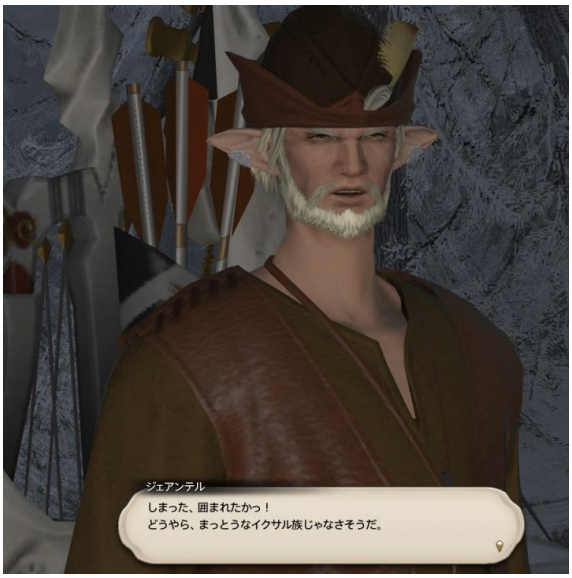
浄罪の地を求めて

ジェアンテル ： この老いぼれが罪深き愚者と知ってなお、わが願いを聞いてくれるのだな……感謝する。
願いというのは、ほかでもない。お主の詩歌を、わしに聴かせてほしいのだ……。
……素晴らしい。ここまで、よくついてきてくれた。先日、お主に同行した真の目的は、お主の成長を確認することだったのだ。
そして今、お主の詩歌を聴き……確信を持った。お主は、弓術と詩歌のいずれも、わしを超えつつある。
わしがお主へ教えられることなぞ、もういくらもない。今こそ、お主に「吟遊詩人の装束」を託そう。
それらは、古の吟遊詩人が、「時神アルジク」への祈りを込めてこしらえた逸品……。
黒衣森で、わしが初めてプクノ・ポキと出会ったときに、あやつから託されたものだ。「吟遊詩人の証」とともにな。
プクノ・ポキは「装束が持つべき者を選ぶ」などと言い、強引に押し付けてきたのだが……。
わしは「中央高地の惨劇」を引き起こした。その後は、罪の重さから逃れたい一心で……
死地を求め、ひたすらエオルゼアをさまよいつづけた。
装束が持つべき者を選ぶのならば、選んでみせよ……と、行く先々で「吟遊詩人の装束」を「古びた麻袋」に包んで、隠し置きながら。
仲間を救えぬ、吟遊詩人の無力さに絶望し……　すべてが疎ましく、何もかも消し去りたい一心だったのだ。
「吟遊詩人の装束」を真にまとう者が現れるなど、考えもしなかった……実に愚かな男よ……。
そのため、お主に託したい「装束」は散逸しており、しかも、在処はいずれも危険な地ばかり。
詳細は、お主の地図に印をつけておこう。
この道のりは、辛く厳しいだろうが……　わが愚行も、アルジクの導きかもしれぬと思えるのだ。
お主という吟遊詩人が、成長の糧とするためのな……。
……わしは確信しつつあるのだよ。プクノ・ポキが言う「装束が選ぶ持つべき者」とは、お主であるとな……。
わしのこの想いを、お主自身の手で証明してみせてくれ。4つの「装束」を集めたら、わしに見せにくるのだぞ。
♪時神アルジクよ　季節のうつろいを引き戻し……♪
♪かつてみた戦いを　我と　この者に語りたまえ……♪

ジェアンテル ： おお、戻ったか。見事に4つの「装束」を集めたのだな！
やはり、お主が「持つべき者」であったか……。お主と出会い、お主と同じ時を過ごしたことで、
わしは新たに多くを学び、そして救われた。
おかげで、数十年来できずにいた決意を固めることができた。わしの準備が終わったら、お主にも明かそう。
それまで、鍛錬を積んでおいてくれ。

命の賛歌

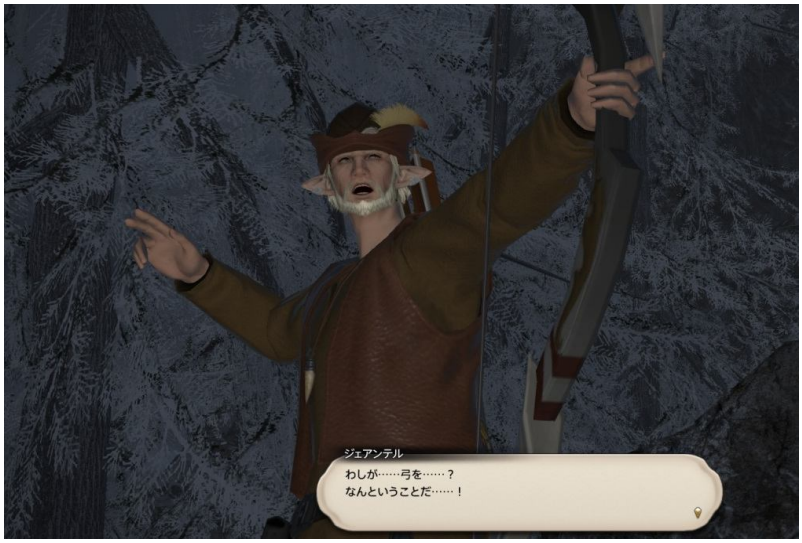
ジェアンテル ： 「装束を持つべき者」であるお主が手に入れるべき装束は、あとひとつ。
その「衣」を、お主に託すときがやってきた。思えば、その衣がすべての始まりだった。
戦場を捨てたとき、わしは黒衣森には戻らぬと誓った。にもかかわらず、おめおめと戻ってきたのは、
「跡継ぎ」を育てるのが目的だったのだ。
おかしな話であろう？　誓いをあっさりと破ったきっかけは、期せずして、ある物が手元に戻ったことだった。
それが、「衣」だ。
数十年前、わしが確かに捨て置いた「装束」のひとつ。ウルダハの市場で見かけたときは驚いたものだ。
長き時を経て再会するとは……。
これこそ、アルジクの導きだろう。償いとして、この衣にふさわしい者を育てよ……　そう言われていると直感して、買い取ったのだ。
ところがどうだ。黒衣森へ戻ったところで、わしを訪れる者は皆、弓術の指導ばかりを求める。
プクノ・ポキに歌ってやることもせず、わしはまた傲慢な思い違いをしたと感じ、立ち去る支度にとりかかった。
そこに、お主が現れたのだ。
衣を買い取ったわしの直感は、間違ってはいなかった。こうして、お主と出会えたのだからな。
今振り返れば、わが身に起きたすべての出来事が、お主と出会うためだったと思えるほど。
そして、お主に出会ったおかげで、ようやく決断できた。仲間たちが散った地にて、わが詩歌を捧げるため……
最後の旅へ出よう、とな。
わが愚行により、仲間を死に追いやって以来、わしは死に場所を探し続けてきた。罪に苦しみ、この罪と苦しみから逃れたい一心で、な。
しかし神は、罪から逃げることすら、お許しになってはくれなかった。
死ぬことも、生きることもできず、絶望の底でうずくまり、涙すら枯れたとき……自然と、わが心に旋律が響いた。
吟遊詩人の「戦歌」の力を、身をもって知った瞬間だ。仲間を癒せる詩歌もあるかもしれぬと、期待した。
それより今日に至るまで、わしが殺してしまった仲間たちの魂を慰める詩歌を求めて、あらゆる地をさすらってきた……。
お主に会い、ともに過ごしたことで、ようやく、その詩歌を歌えそうな気がするのだ。
その鎮魂の詩歌を歌うべき場所は、わしが「惨劇」を引き起こした地……クルザス中央高地。
「アドネール占星台」の西に、惨劇の痕跡を記す、ささやかな墓碑がある。そこへ、わしを導いてほしい。
お主の詩歌が、存在が、わしに立ち向かう勇気をくれた。ゆえに、お主にも聴いてほしかったのだ。
わしのすべてを込めた、贖罪と鎮魂の詩歌を……。
到着したら、かの地に眠る仲間たちへ、お主からも「ニメーヤリリーの花束」をたむけてやってくれ。
すべてが終わったら、吟遊詩人の「衣」を託そう。
♪時神アルジクよ　太陽と月の運びを逆行させ♪
♪かつてみた戦いを　すべての憤りと嘆きを……♪
♪御心のまま　我とこの者に　語りたまえ……♪



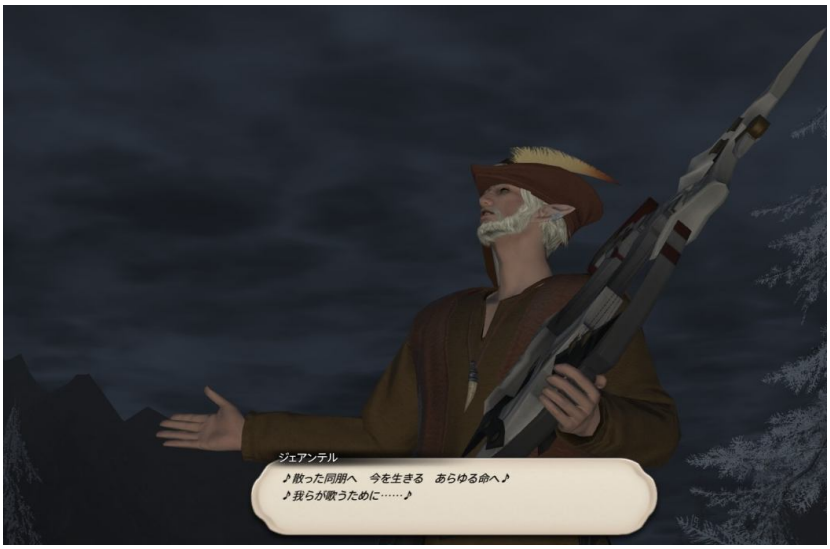
ジェアンテル ： しまった、囲まれたかっ！　どうやら、まっとうなイクサル族じゃなさそうだ。
死ぬな、◇◇◇！！　もう、わしのせいで、大切な人を失いたくない！
くっ、やはり撃てぬ……。
またしても、わしのせいで大切な命を消してしまうのか……。
中央高地の惨劇と、同じ無念を味わいたくはない……。

強弓のジェアンテル ： せめて……できることで最善を尽くそう。
強弓のジェアンテル ： ◇◇◇よ！　わしのそばに来るのだっ！
強弓のジェアンテル ： わしの失態で、これ以上、誰かの命を奪うわけにはいかぬ！　せめて全力で歌おう……大切な、お主を守るために……！
強弓のジェアンテル ： ◇◇◇……！　耐えろ、倒れるな……わが歌を聴き、力となすのだっ！

ジェアンテル ： 再びここに立つ日など、二度とこないかと思っていた……。ずいぶんと長いこと、仲間たちを待たせてしまった……。
ありがとう、お主のおかげだ。さあ、わが命を込めた鎮魂の詩歌を、今こそ歌おう……。



ジェアンテル ： わしが……弓を……？　なんということだ……！
お主が、弓を撃たせてくれたのだ……。
お主の歌声……行動……いや、存在そのものが……　わが魂を癒してくれていたのだな……。
わしを、お主へ導いてくれた吟遊詩人の「衣」だ。これをまとい、これからも多くの人を勇気づけてほしい。
頑固な老いぼれでも、まだ変われるのだね。生きてさえいれば……な。
散った仲間に気兼ねして、死んだように生きてきたが……　やめだ。これからは、散った仲間の分まで全力で生きる。
わしは再び弓を持ち、神勇隊に協力しよう。今を生きる者のために……。これぞ、仲間にとって最大の鎮魂……。
新たな旋律が響いたか。わしが教えることは何もない……むしろ、教えられたのだ。
聴いてくれ……仲間、いや、すべての命へ捧げる賛歌を。
♪時神アルジクよ♪
♪時の流れを逆流させて　すべての喜びを♪
♪御心のまま　我とこの者に　語りたまえ……♪
♪散った同朋へ　今を生きる　あらゆる命へ♪
♪我らが歌うために……♪
◇◇◇よ。こんな老いぼれに、長らく付き合ってくれて、ありがとう。
お主が奏でる「戦歌」は、多くの人を奮い立たせる。これからも、多くの人に希望を与えてくれ。……では、また会おう。



登場人物

ジェアンテル：かつて神勇隊の強弓と称えられた吟遊詩人

プクノ・ポキ：モーグリ族。南部森林に出没

ルシアヌ：弓術士ギルドマスター